

2005年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：104 カ国

応募総数：3,661 作品（子どもの部 2,215 作品、若者の部 1,446 作品）

文部科学大臣奨励賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『僕の仕事は隣人の空腹を満たすこと』
ブルンチウク・ミハイ（モルドバ）14 歳

<若者の部>

- 『世界を癒す：どのように地球を思いやることができるか』
ヌスラット・ハック（バングラデシュ）18 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『世の中にムダな物は何一つないんだよ』
吉田 沙央莉（兵庫県）11 歳
- 『これは本物、それとも正しいこと？』
R J・ダバー（米国）15 歳

<若者の部>

- 『農業から環境を考える』
浮階 沙織（千葉県）17 歳
- 『人々を目覚めさせよ』
エプロニア・アゼール（エジプト）18 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- ジェム・エリカ・A・ニック（フィリピン）10 歳
- 今井 梨花（米国）12 歳
- リンダ・チュー（ニュージーランド）11 歳
- モーゼス・アトラムス（ガーナ）15 歳
- モニカ・コワルスカ（ポーランド）15 歳

<若者の部>

- 西山 健二（静岡県）17 歳
- チャンダ・ムタレ（ザンビア）19 歳
- サラ・キャメロン（オーストラリア）
- チャン・テ・フオン（ベトナム）23 歳
- トマス・シニキ（リトアニア）23 歳

佳作（各 25 点）

<子どもの部>

- ジェリカ・C・シー（フィリピン）8 歳
- レギス・マーティン・C・アングナル
（フィリピン）9 歳
- ジェーン・メリル・ダルデ（フィリピン）11 歳
- デニツァ・ゴンザレス（メキシコ）11 歳
- カリサ・ベルナデッテ・ポブレ
（フィリピン）12 歳
- ダラル・エッサ・アブドゥル・フセイン
（オマーン）12 歳
- バイリー・レニー・ロリンズ（米国）12 歳

<若者の部>

- 田村 幸子（東京都）15 歳
- アユシ・チャラン（インド）16 歳
- オルガ・クラスニャコバ（ベラルーシ）16 歳
- ニコラス・ダモンテ（アルゼンチン）16 歳
- S・A・D・プルサラ・マダヴィ・ラナマル
（スリランカ）16 歳
- カタモヴァ・ロラ・サニアロフナ
（ウズベキスタン）17 歳
- ジェシカ・ケーラー（ドイツ）17 歳
- ナタリア・ルビオ（チリ）17 歳

- 石川 紋子 (兵庫県) 13 歳
- エリナ・エニキーヴァ (ウズベキスタン) 13 歳
- ジャムシッド・ハキモフ (ウズベキスタン) 13 歳
- 前田 夏実 (東京都) 13 歳
- ステパノヴァ・アンナ (ロシア) 13 歳
- エカテリーナ・シュレイコ (ベラルーシ) 14 歳
- シャルビル・サーキス・カタール (オマーン) 14 歳
- ドリス・デ・レオン・ヴァルガス (フィリピン) 14 歳
- メロディ・ケイ・O・キャロリーノ (フィリピン) 14 歳
- アンドレア・セレイ (チリ) 15 歳
- エリアス・サーキス・カタール (オマーン) 15 歳
- シェッド・ハッサン・アリ (パキスタン) 15 歳
- ジャニス・エルナンデス・アギラ (フィリピン) 15 歳
- ジュワン (ロシア) 15 歳
- ジーン・ミッシェル・マナラング・レガスト (フィリピン) 15 歳
- ナデスタ・アレクサンドロヴァ・イヴァノヴァ (ブルガリア) 15 歳
- ビジेत्र・ロイ (インド) 15 歳
- ララ・クリスティ・S・ラヴァ (フィリピン) 15 歳
- ミカエラ・ヴラディミロヴァ・ゲオルギエヴァ (ブルガリア) 17 歳
- クリュカイト・コルネリーヤ (リトアニア) 18 歳
- ステファン・オナジテ・ジャグボロ (ナイジェリア) 18 歳
- 宮永 幸則 (東京都) 18 歳
- シェリール・アモイエ・マックラーリ (ジャマイカ) 19 歳
- ビスマルク・マルフォ・アパー (ガーナ) 19 歳
- サンジータ・デヴィ (フィジー) 20 歳
- メガン・ヴァン・エック (南アフリカ) 20 歳
- カッサニー・スリンプラティープ (タイ) 21 歳
- ギリアン・A・コー (カナダ) 21 歳
- シャンク・タチアナ (ロシア) 21 歳
- スリヤーニ・ルックマン (インドネシア) 21 歳
- ヴェロニカ・コスチュニーナ (ロシア) 23 歳
- クリフォード・エメカ・オクウェシ (ナイジェリア) 24 歳
- ルイス・レギナルド・L・メディロ (フィリピン) 24 歳
- メドヴェッチ・マリアナ (モルドバ) 25 歳
- ステファン・ライアン・メンジーズ (オマーン)

学校特別賞 (1 校)

- 東京都江東区立深川第三中学校

僕の仕事は隣人の空腹を満たすこと

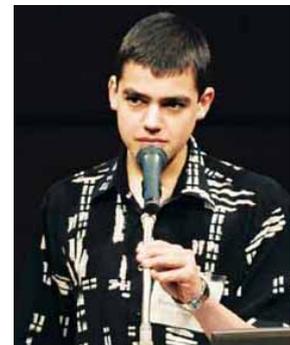
（原文は英語）

ブルンチウク・ミハイ（14 歳）

モルドバ共和国チシノウ市

チシノウ市立ゲオルゲ・アサチ中学校

地球は僕たちの周りのすべてです。でも、世界中で起こる何百万件もの出来事や問題のすべてに、一人の人間が対処することなどできません。空腹の子ども、捕獲された動物、世界中で苦しむすべての生き物のために身を挺することは、人間には不可能です。だから全世界を救うのではなく、友人や隣人や地域社会に援助の手を差し伸べることに集中するというのが僕の信念です。小さな部分を良くすることによって、地球を良くするのです。



3、4年前までは、問題を解決することは両親や政府や役所の仕事で、僕の仕事ではないと思っていました。たかが13歳の平凡な少年に世の中を変える力などあるわけがありません。ところがある時友人が、ユース・ミレニアム・アクションという、世界の問題を地域レベルで解決しようという、世界中の子どもたちを対象にしたプロジェクトに誘ってくれたのです。僕は、最初のチームミーティングでグループコーディネーターが言った言葉を忘れることが出来ません。

「君たちの中には、一日で世界を変えられると思って来た人がいるかもしれないね。空想家さんたち、そういう夢物語は忘れることだ。私たちにはこの地球をまるごと救うだけの、お金も力も影響力もないんだ。でも、地域の手助けをする手段はある。それなら、ここから始めようじゃないか。ここを助けよう。ここを変えよう、今すぐに。」こうして僕たちは変え始めたのです。

最初の仕事は、街を流れている川の土手を清掃し、ベンチをいくつか置いて、木を植えることでした。2ヶ月かけて仕事をした結果、それ迄だれも何もしなかった場所は、ちょっと洒落た河原とまではいかないけれど、明らかに僕たちが来る前より良い場所になったのです。2番目の仕事は、地元の盲学校の手助けをすることでした。盲学校の生徒と会って分かったのは、彼らのほとんどが、それまでに本を読んだことがないということでした。予算不足から学校は点字の本や新聞などを全く購入出来なかったのです。僕たちは、一番簡単な方法でその子どもたちを援助することにしました。それはカセットテープを買ってきて、図書館から何十冊も本を借りて、それを全部朗読して録音することでした。盲学校の子どもたちは読むことは出来なくても、僕たちが読み上げたおもしろい物語を聞くことは出来るのです。子どもたちにテープを渡す日、僕たちのチームと新しい友だちのどちらが幸せだ

ったのか、僕には分かりませんでした。彼らは、この真心のこもった贈り物に感謝をしてくれました。僕たちは、価値ある仕事が出来た喜びで一杯でした。

遊び半分の気晴らし程度の気持ちで始めた仕事が、少しずつ本格的になっていきました。ついには、僕も何かを変えることが出来るんだ、問題を解決するのが僕の仕事なんだ、と思うようになったのです。世界は個人個人の集まりなのだから、もし個人が何らかの方法で自分の属する地域社会を改善したなら、結果として世界の改善になって、それにより一人一人の生活も良くなるのだ、ということが分かったのです。

活動が終わった時、コーディネーターは僕たちに小さなカードをくれました。それには、「親愛なる空想家たちへ。将来君たちが世界の飢えた人たちを救おうとする時には、まず空腹な隣人を救うことを忘れないでほしい。頭は世界に、行動は地域に」と書かれていました。この経験は僕に言葉で言えない変化を与えてくれました。マザー・テレサみたいになったわけではないけれど、隣人の空腹を満たすことで世界を変えていく、いいヤツに変えてくれたのです。

世界を癒す:どのように地球を思いやることができるか

(原文は英語)

ヌスラット・ハック (18 歳)
バングラデシュ・ダッカ市
ダッカ・ノース・サウス大学

「地球を癒そう
もっと良いところにしよう
君のため 僕のため
そして人類全てのために」
……………マイケル・ジャクソン

38 人が一つになった合唱に私は圧倒され、気がつくや教室の白い壁に歌声がこだましてプログラムは終わっていました。ゆっくりと家に帰る間も、歌詞がまだ耳の中で響いていました。そして、ふと回りを見て愕然としました。道路はゴミだらけで見るも無残でした。飲み食いした後のコーラの缶やサンドイッチの包み紙、ビニール袋が絡まって、どんなにすくってもきれいになりそうもありません。溢れた下水管が「直して。きれいにして。」と泣いているのが、初めてわかりました。12 年間通いなれた、いつも授業に遅刻しないように走っていた道です。周囲に起きていることには目もくれず、「誰かが何とかしてくれる」と思っていた道です。しかしこの時気付いたのです。「そんなふうには思っていた私は、何て世間知らずだったのだろう。どんな小さなことでも、自分の努力で周りの意識を変えられるのだ」と。



地球意識を育む教育がほとんど行われていないバングラデシュのような国では、人々が地球を思いやることなくても驚くことではありません。私は、この世界を本当に良くするために役立つ一歩を踏み出す時が来たことを知りました。

翌日、学校に行った時はやるべきことが分かっていました。校長の力を借りて最初のプログラムを始めました。飲料の空き缶を 12 個ためて学校の食堂に持っていきと新しくできたウォーターパークの無料チケットがもらえるというプログラムです。それから数日、固唾を呑んで見守っていましたが、誰も本気にせず、注意もしていないようでした。

ところが 1 週間近く経って空き缶が集まり始めたのです。なかには道路に落ちていた缶もあるよう

でした。その辺に空き缶をポイ捨てる人が減ったということです。私は嬉しくなり、このプログラムはうまく行くと思いました。翌日の朝会で、教養ある市民として活動し、環境汚染を防止する社会を創ることについて、私はスピーチしていました。校長がゴミ箱の利用を強く呼びかけてくれて、ポイ捨てしたことが見つかったら、放課後 1 時間残って清掃係の清掃を手伝わなければならないことになりました。

私は学校から始めた活動を徐々に自宅のまわりにまで拡げていきました。父と父が以前会長を務めていたロータリークラブの協力を得て、戸別のゴミ収集を始めたのです。時には 1 週間後でなければ役所のトラックが収集に来ない離れた集積場までわざわざ捨てに行かなくてもよくなりました。玄関先にゴミを置いておけば、収集係が遠くのゴミ処理場に持って行って捨ててくれ、そこでリサイクルが行われるようになったのです。すぐに地域に変化が現れました。ゴミ集積場から出る悪臭が減ったのです。見た目にも清潔感が増し、実際に息を止めなくてもそばを歩いて通れるようになりました。

私は、より良い社会を創るためにキャンペーンを続けるとともに、ロータリークラブやインナーホイールといった様々なクラブに、健全な社会づくりが世界に広がるための様々なプログラムの開始を呼びかけました。ビニール袋を使わないように呼びかけるパンフレットを作成し、医療機関には、医療廃棄物を近くの川にそのまま捨てず、焼却炉を使用することを頼みました。学校では学生集会を開き、新鮮できれいな空気を吸える緑の社会を求める横断幕を掲げて街中を行進しました。

そこから勢いづいていきました。プログラムに対する人々の反応が良くなり、瞬く間に、環境や社会の心配をするのが私 1 人ではなくなったのです。環境汚染に反対して国全体が立ち上がるまでにはほど遠い状況ですが、どこかで誰かが一歩を踏み出さなければならなかったのです。私は一歩を踏み出しただけでしょう。しかし私はいつも夢見ています。皆で

「地球を癒そう
もっと良いところにしよう
君のため 僕のため
そして人類全てのために」

と歌える日を。

そして、人類全てのために、地球をよいところにする行為を誇りに思える日を。

世の中にムダな物は何一つないんだよ

(原文)

吉田 沙央莉 (11 歳)

兵庫県

明石市立二見小学校

私の祖父母は田舎の緑いっぱいの村で暮らしている。空気もまだまだきれいだし、家の回りは水田だからかえるの声でにぎやかだ。私は祖父母の家に遊びに行くたびに植えてくれているとまとやきゅうりをちぎって取り立てにかぶりついている。包丁をあてるとまずくなると祖父が言っているからだ。祖父の作った野菜はとにかくとびきりおいしい。

ところが祖父母の畑の隣の空き地に大分前から古い自動車が捨てられるようになった。始めは解体する前に一時的においてあるのかと思ったが何年間も放置してあるだけで、時々積みっぱなしの自動車がひっくり返るようになったので、危険だから近づかないようにということになった。あの緑の田園地帯に一体誰がこんなものを捨てにくるようになったのだろう。元気な稲がすくすく育っていく横で朽ちていく自動車たちは不気味でそして悲しげだ。時々夜中に人が来ていらなくなったバッテリーを捨てていたり、まだ使える部品は持ち帰ったりしているようだ。何だか人間の勝手な姿を見せつけられているようでとても嫌な気持ちになってしまう。

あの自動車を一台作るために一体どれだけの資源が使われたのだろうか。おそらく鉄を含むたくさんの鉱物資源を始め、ゴム、ガラス製品などさまざまな材料が使われていると思う。まだ使える部品も残されたままなのだからこんなふうに使って捨てにせず、もう一度再生利用できないのだろうかと残念な気がする。私達も日頃からペットボトルや古紙の回収もやっているが、これからはゴミを減らして出来るだけ人工的なものを残さないようにしないと、あっという間に地球はいらない物であふれかえってしまう。

私がこのように思うのは自動車のゴミの山の隣で今日も一生懸命畑を作っている祖父の姿を知っているからだ。話がもとにもどるが祖父は、畑はもちろん、普段の生活を見ている、物をリサイクルすることに徹底している。たとえば畑はまず土作りから始まるのだが、最初に野菜のくずや庭の落ち葉を混ぜた土に酵素を入れて発酵させた強い土を作る。合成の化学肥料は便利だが、結局虫や病気に弱い野菜を育てることになるので使わない。種まきは雨が降る直前にするし、足りない時は四十年前から使っている井戸水を利用している。草引きが本当に大変で、私も手伝うが除草剤は使わない。こうやって無農薬の安全な野菜作りをする一方で、祖父は公園に捨てられているアルミ缶を集めて近所の小学校に持っていつている。アルミ缶が集まるとお店の人が買ってくれるので、そのお金で一輪車

や竹馬が増えていき、子供達も喜んでいる。祖父の住んでいる家にしても、実は自分で仕事が終わってから祖母と二人でこつこつ作った家なのだ。珍しいので新聞でも紹介されたいが、小さくても風がよく通るし、淡路のいい瓦を使っているので屋根が暑くなりすぎないですむ。家の回りには落葉樹を植えて、冬は暖かく、夏は涼しく住んでいるし、その落ちた葉や庭で飼育しているにわとりの糞を混ぜてさっきの強い土作りを完成させるのだ。

私は、こうやって祖父母達の手作りする生活を見ていると、確かに時間もかかるし大変だけど、後に豊かなすばらしいものがちゃんと残るので便利な生活に惑わされたいけないと実感する。祖父母達は口ぐせのようにこう話しているのだ。「世の中にムダな物は何一つないんだよ」って。

あの自動車たちを見てもせつかく地下から掘り出したいろんな資源で作られているのだから、それをもう一度利用できるような良い方法を考え、もっと最初から計画的に実行できないのだろうかと思う。大切な地球の限られた資源をずっと使い続けるために、いろいろな有効な方法を考え、工夫し、そして実行していくことが必要だ。そうすることで地球を傷つけずにすむ本当に豊かな生活を私達は送ることができるようになると思う。

これは本物、それとも正しいこと？

(原文は英語)

R J・ダバー (15 歳)

アメリカ合衆国テキサス州

キンケイド中学校

僕は世界っ子です。15 年間の人生の大半を外国の地で過ごしました。氷河をスキーで滑ったり、熱帯雨林をトレッキングしたり、自分と異なる人々の生活も見ました。貧困や、差別、戦争のもたらす痛みや苦しみも目の当たりにしてきました。地球は素晴らしい所だけれど、僕はこれらの深刻な問題が心配です。貧困、無関心、病気の悲惨な状況はどこにもあります。水道も無く、エイズがひどく蔓延しているような不衛生な村々にも行ったことがあります。地球の温暖化や、資源の枯渇、化石燃料への依存が進んでいることに、僕は不安を感じています。いつもどこかで起こっているように見える戦争による破壊もそうです。僕はかつてウィンストン・チャーチルが「戦争はどんな恐ろしい言葉で表わされる事よりも恐ろしい」と語った言葉を思い出します。僕もそう思います。とてつもない資源に恵まれた大きな地球は、素晴らしい目標に到達するチャンスを与えてくれるはずですが、それには遥かに及ばず、僕らがこのかけがえのない地球を正しく守り続けたとしても、前方には大変な試練が待ち構えています。

僕たち一人一人の役割は、教育や人生経験によって決まるものだと思います。地球をしっかりと守るためには、共感と、自分は地域の一員であるという責任感を持って行動しなければなりません。でも、それ以上に大事なことは、勇気を持って周りを引っ張っていくことだと思います。僕はアメフトをやっていますが、チームワークとチームへのコミットを必要とされるスポーツです。いつも競技場に入る度に、僕は自分のためにプレーするのか、チームのためにプレーするのかを決断しています。その結果を考えてみて下さい。では、この決断を毎時間下している医師や、教育者、政治家、そして企業の CEO（最高執行責任者）について考えてみましょう。世界中の人々は、彼らが下す決断をニュースや広告として毎日受け取っています。彼らの発するメッセージに、政治的意図や、自己中心的な目的、利益へのあくなき欲望がなかったらどうかと想像してみてください。これらの多額な資金をかけた巨大広告キャンペーンが、唯一「チームのための」という目標、即ち最終利益以上の、地球規模の目標を掲げていたと想像してみてください。

幾つかの数字を、巨大企業のコカコーラ社を例に見てみましょう。コカコーラのようなとてつもない力を持った会社は、幾つかの国々よりは大きな財力、認知度、影響力を持っています。人々の考え方や生き方さえもコントロール出来ると言う人もいるかも知れません。コカコーラは、16 億ドル近く

ものお金を、誰もが知っているスーパーブランドの宣伝に使っているのです。経営陣が強い勇気を持って、1年間だけこの予算を学校建設や教育機材のために使うことを想像してみましょう。これによって、未来のリーダー、発明家、あるいは科学者は、自分たちの人生を変えるチャンスが与えられるのです。彼らがコカコーラからのお金で建った自分の村の学校に通ったり、コカコーラの奨学金で大学まで行ったりするのを想像してみてください。コカコーラはこのキャンペーンで、きっと会社の歴史上かつてない程の名声を得ることになるでしょう。このアイデアを実現させるには、単なる伝統的な巨大企業反対運動以上の方法が必要となります。草の根的に、それぞれの家庭や学校地域で始めなければなりません。

コカコーラの例を続けましょう。コカコーラのどこにでもある「it's the real thing (これは本物だ)」というスローガンは、「it's the right thing (これは正しいものだ)」と読み替えることができます。地域の活動家や、僕のような子どもたちの力で、コカコーラを買う代わりに、そのお金を教育基金や地球環境プログラムのために使おうという運動を始めることができます。コカコーラをボイコットすることで、経営陣の関心や財源を、より大きな問題に振り向けさせることができます。僕ならドリンクのお金を教育基金に寄付するよう、友だちに働きかけることから始められます。こういう運動は子どもたちが始めるべきです。大人たちがリーダーシップを発揮して、この地球をまもるために、若い世代、僕の世代に行動の責任と、それ以上に大事な説明責任を与える必要があります。「コカコーラを飲むのを止める」だけで、教育や乏しい文化インフラに著しい改善が見られるかも知れません。僕の世代が真剣にこの問題を考えていることを、コカコーラ社のような巨大企業に訴えることで、僕たちにチャンスが与えられるかも知れません。

そのためにはものすごく努力をしなければなりません。僕はチームワークと、はっきりとした目標によって、きっと成功させられると楽観的に考えています。コカコーラ社、ペプシ社、あるいはナイキ社のような大企業は、リーダー的な役割を果たすことができます。僕にはどの多国籍企業が最初に声を大にして「ストップ・広告」キャンペーンを始めるかは分かりませんが、どこかがこのキャンペーンを始めるように働きかけていくつもりです。様々な科学的なことに興味がある10代の若者として、自分の仲間たちに影響を及ぼしていけたらと願っています。僕は、世界市民に、責任ある環境保護者になりたいのです。もしコカコーラを飲むのを止めることで可能になるのであれば、止めるつもりです。

農業から環境を考える

(原文)

浮階 沙織 (17 歳)

千葉県

千葉県立茂原農業高等学校

青々と繁った葉を空に突き立てて稲は成長している。土から栄養を吸い上げるために根を深く張り、秋にはたわわに実る稲穂をつけるのだろう。私は満ち溢れる自然のエネルギーを感じながら、田園風景の広がる町で生まれ育った。春は一斉に芽吹いた緑の中で遊び、夏にはカエルの子守歌代わりに眠り、秋は黄金色の稲穂が揺れる情景を眺め、冬にはひっそりと佇む水田を見守った。私の生活は自然と接していて、緑がある風景と共に進んでいく。しかし、私は時々不安になる。本当にその風景は環境を考える視点から見て良いものなのだろうか。

こう考え始めたきっかけは、私の所属している部活動にある。私は現在、農業土木を学ぶ生徒で構成された農業土木部で、部員と共に谷津田（山と山の間にある谷に造られた水田）の水田環境を保全している。千葉県では約六割の谷津田で耕作条件の悪さや、土地所有者の高齢化、後継者不足等が原因で耕作放棄が進んでいる。しかし、谷津田はトウキョウサンショウウオやニホンアカガエル等の水辺生物の貴重な生息空間なのである。また、日本種は絶滅してしまったトキの生息場所に地形が良く似ていて、私たちが活動を行っている場所は野生種が生息する中国の地域と緯度や年間を通した気温がほぼ同じという状況にある。このまま保全活動を続けていけば、トキが訪れることも夢ではないと考えられる。その谷津田は三十年もの間放置され、ヨシや篠竹が繁茂したため地表に日光が届かず、動植物の多様性は失われていた。スコップや鍬を手に、全て人力で再生した谷津田での作業は農業土木の原点である水田環境の整備そのものだった。そして、私たちは今までにない生物を育む機能を高めることを目的とした水田を造ることにし、その水田を「ビオたんぼ」と名付けた。畦を広めに取って中心を掘り下げ、二重構造にしたことが一番の工夫点である。掘り下げた部分には植物が生え、カエル等の隠れ場所となる。その畦で囲んだ区画と標準畦の区画を比較すると、生物の固体密度は高まり、トキが生息できる自然環境づくりの目標値を上回ることが出来た。しかし、収量は減少してしまった。稲作で生計を立てる人々にとって収量が落ちるということは致命的なダメージにつながる。また、ビオたんぼは畦を造るのが難しく、維持、管理も労力を要してしまう。このままでは、自然に優しい農法を確立するはずが、谷津田から人が離れる原因になりかねない。掘り下げた部分に生やす植物の種類や量を選択する等の改良を重ねていき、トキが訪れるような、人や生物を始め全てに優しい水田造りにこれからも挑戦していきたいと思っている。活動を通して、幼い頃から見慣れた自然はこ

うした荒地も含まれているということを知った。私が今まで見てきた物は一体何だったのだろうか。この自然に新たな価値を見出し、活かし合うことが必要だと痛感した。

今、人々の目は環境問題に向いてきている。世界にはたくさんの農業がある。もちろん、自然破壊を伴うものもある。農薬や除草剤を用いた農業は、確かに人々の労働を軽減させてくれるが、土壌や生物にとって大きなダメージとなる。そこで私は、部活動で作り上げようとしているビオ田んぼを発展途上国を始め、世界中に広めたいと思っている。生物を利用した農法を確立させれば、誰が食べても安全な農作物の供給や次の世代に残せる土壌を保全出来るだろう。

人口が増え続ける地球を支えるのは農業力だと思う。そして、今残っている自然を守るためにも環境に優しい農業が求められている。私は将来、保全活動をリードすることができる人材を育成する立場として農業高校の教諭になりたいと思っている。私たちのような高校生を軸に小中学生への環境学習を行い、地域の活性化や国際交流を深めていけば、いつかこの輪の広がりが町や県、国を越えて世界中に広がり、ボーダーレスの環境問題に正面から向き合っていけると思う。私は、そこに問題解決の糸口があると信じている

人々を目覚めさせよ

(原文は英語)

エプロニア・アゼール (18 歳)

エジプト・アレキサンドリア市

アレキサンドリア・インターナショナル・スクール 3 年終了

今回のコンテストのテーマを見て、この終わりのない問題について「話さなければ」と思いました。私の国では、自然の問題は昔から深刻な経緯をたどってきました。誰でも自然に対する義務について否定的な感情を抱いています。これがこの問題について自分の体験を書こうと思った主な理由でした。

最初に「私の国の国民がなぜ自然に対して責任がないと考えているのか」、その理由を明らかにしましょう。エジプト人は独立と自由のために何世紀も戦い、1950 年代にやっとそれを手に入れることができました。しかし「自国を再建し、全ての破壊を克服しなければならない」と国民が気付いたのは、1973 年にシナイ半島が解放されてからのことでした。ところが、国民全員が、国のためではなく、自分のために未来の再建へと突き進んだのでした。人々は安心感を求めることを望み、誰も人に協力しませんでした。砂漠に埋まっている爆弾を除去しようとは思わず、ビルや工場用の広い敷地を確保するために木が伐採されました。人々は無頓着になり、環境法にたやすく違反し、国の本当の発展について気に止めませんでした。これは、国の自然や人々の健康にとって致命的、壊滅的でした。こうした身勝手な行動について誰を責めたらよいのか私には全く分かりません。人々が助け合って再建した国も多数あり、人々の身勝手な行動を一概に戦争のせいにするわけにはいかないのです。しかし、自然に対する「私の知ったことではない」というこの態度は、多くの人々が掲げなければならない「テーマ」になってきました。そろそろ若者が中に入り、この破壊行為を止めさせるよう努力する時期に来ていました。

私と友人はまず簡単なことから始めました。絶対に道路にゴミをポイ捨てしないようにしたのです。これは難しいことでした。市にはゴミ箱がとても少なく、あっても扱いが悪かったり、時によってはゴミ入れ以外の目的に使用されたりしていました。ポイ捨てをしないことを実践することによって、私は行動や習慣が改善され、人から手本にされるようになりました。

やがて大きな環境問題に取り組まなければならなくなり、「私たちの共通目的」というグループを結成しました。グループの使命は、住宅、ゴミ、霧困気全体の大改造を必要としている貧しい地域の問題に取り組むことでした。最初にアンケートを行い、地域についての人々の意識を調べましたが、ほとんど誰からも真剣に取り合ってもらえませんでした。対象地域の写真を撮り、その地域について文章を書き、これらの地域を助けるために人々を動かし、寄附をしてもらおうとしましたが、私たちの

仕事には誰も興味がなかったらしく、資金集めは失敗に終わりました。とにかく一生懸命に取り組んでいたのですが、グループに起きた現実を見て、市民を「啓蒙」し、「環境を守ることは市民の責任である」と伝えることが先決であると気付きました。私たちは、「劣悪な状況で暮らしている人々の生活を向上させる」というプロジェクトの目的に単刀直入に入っていくことはできませんでした。なぜならば、誰も責任のある批判的な目でそうした地域を見ることすらしていなかったのです。「そうした場所は、疫病のようなものだ。瞬く間に広がっていく」と全員に気付いてもらう必要がありました。つまり、習慣や考え方を抜本的に変える必要があるということです。これは、行政だけでなく、メディアや学校、NGO にやってもらわなければならないことです。環境に関する現実に即したプロジェクトや自然観察などを実施し、人々、特に子供の心に自然や自分たちの住んでいるところに対する興味が芽生えるようにする必要があります。

私は、作文のテーマに「人々を目覚めさせよ」を選びました。その理由は、「目覚めさせる」ことは効果的で費用もかからないからです。また私は、エジプト・アレキサンドリア図書館で友の会青年委員会の仕事もしており、そこで小さなプロジェクトを立ち上げ、子供たちに話をしたり、様々な問題について人々の注意を促す機会を与えられています。そうした話題の中に「自然」が含まれていることは言うまでもありません。

世界では様々な科学技術が発展してきました。こうした科学技術によって生活は便利になりましたが良くなったわけではありません。今日直面している、汚染や自然の問題によって、今ほど多くの工場や施設がなかった頃には存在していなかった病気が発生しています。

要約すると、私が世界に伝えたいメッセージは、「自然の犠牲の上に快適を求めてはならない」ということです。また、自分の住んでいるところは自分の人格の一部です。地球に優しくするということは、自分たちに優しくするということ、そして病気や災害を防止するということです。ですから、市民1人1人が自分の住む地域や町、そして国全体の見た目を十分に維持するような法律を実施すべきです。いずれにせよ、これらの法律は、法律を執行し、法律が守られるようにする警官の存在が必要になるでしょう。地球の恥ずべき状況を嘆く声はどんどん大きくなっています。その声に耳を傾けてくれる人はいるのでしょうか？

私たちの地球をまもる

(原文は英語)

ジェム・エリカ・A・ニック (10 歳)

フィリピン共和国カラウアグナガ市

ナガ・セントラル小学校

私たちは毎年イサログ山自然公園に遊びに行くのを、とても楽しみにしているのですが、今年は特別でした。それはアメリカから、いとこのマルセリとモリが帰省して来たからです。私たちは自然公園事務所から 1.2 キロの長い道を登って、それからマラスベイ滝を降りる道を下ってゆきました。最初私たちのお客さんである、いとこや、いとこのお父さん、お母さんやその家族の友人たちは、ひりひりする程暑い午後の日差しにうんざりしていました。でもマラスベイ滝の澄み切った水を見ると、皆で冷たい水に飛び込んで、それまでの疲れや暑さを吹き飛ばしました。

でも、皆の喜びは長続きしませんでした。それは仲間の一人が滝壺の底に沈んでいた、割れたガラスでけがをしてしまったからです。マルセリと私が見回すとあちこちにゴミが捨ててあります。すると母が環境を破壊するゴミや、その他の廃棄物について話をしてくれました。母はゴミや割れたガラスは、私たちが地球をまもるために気を付けなければならない物の内の、ほんの一部だということを教えてくれました。

学校でちょっと見回すだけでも、ゴミがあちこちに目に付きます。紙やビニール袋を投げ捨てて、水路や排水溝を詰まらせてしまう生徒がいるのです。水路が詰まると、そこに蚊が卵を産んで、それが成長して生徒たちを刺したり、時には死に至るデング熱を起こしたりするのです。子供たちはゴミになった紙やビニール袋をゴミ箱などをちゃんとした場所に捨てるべきです。学校にない時には、ポケットや、かばんに入れて家に持ち帰り、家のゴミ箱に捨てればいいのです。

家では母はゴミを分別しなさいと言います。ビニール袋は捨てずに再生できるのです。ノートも全然使ってなかったり、書いてなかったらリサイクルできる物もあります。母は、生ゴミや腐敗する他のゴミは、堆肥にできるのだと言います。正直言って、私の家では堆肥を作っていません。それは場所が無いからです。私の住んでいる市には資源再生施設があって、各家庭から廃棄ゴミを集めています。これはゴミの投棄を減らすのに役立っています。

そうこう話しているうちに、私たちがいるイサログ山自然公園の熱帯雨林に話が戻ってゆきました。そこは市が、森の植物や動物の生物的多様性を保とうと、保護地域にしています。

イサログ山のような熱帯雨林では木は密集して繁るので、葉がキャノピー（天蓋）と呼ばれる一種の屋根のようになっていて、日光をほとんどさえぎっています。このキャノピーの下には色々な種類

の植物や動物が生きています。落ち葉は暖かく、湿度が高くて暗い森の地面ではすぐに腐敗します。そして、多くの栄養分を出し、それを木や他の植物が吸収します。森は動物の食べ物の宝庫でもあります。多くの生き物が木の中に住処を作ります。動物はまた、木を敵から身を隠すために使うことができます。冬には木の中で寒さから身をまもり、子供を木の枝の中で育てることができます。

しかし、私たちの森はどんどん消えています。人口は日々増え続けるため、人々は作物を育てたり、居住するためにより大きな土地が必要になります。居住地域が広がるにつれ、人々は木を伐採して、それで紙や、家具や、建材を作ってきました。薪を取るためにも木々は切り倒され、森林地帯は開発され、燃やされ、作物を育てる畑に通じる道路が作られます。その上葉や若芽を食べる家畜の放牧により、若木の成長が止まってしまいます。

緑の植物がなぜ私たちにとって重要なのでしょうか？ なぜ私たちは植物を大切にしなければならないのでしょうか？ それは、緑の植物の葉は空気中から二酸化炭素を吸収するからです。それを水と日光に化合させて養分にします。養分ができると葉は空気中に酸素を放出します。人間や動物は呼吸で酸素を吸収して、二酸化炭素を排出します。ですから木を伐採すると、私たちが呼吸する酸素が足りなくなってしまうのです。酸素を作り出す以外にも、木や他の植物の根は地中深く伸びて、土壌を固めるのに役立っています。地面はこうして水を蓄えることが出来るのです。山腹の木を伐採すると、土壌を繋ぎ止めるものが何もなくなってしまいます。少しの雨でも大量の土壌が押し流されてしまい、大雨は洪水を引き起こします。

木を保存するために人間は何が出来るとでしょう？

- 1) キャンプやハイキングに行くときは、ゴミはすべて家に持ち帰る。
- 2) キャンプファイアーはきちんと消す。
- 3) 木の枝を折ったり、幹に自分の名前を刻んだりしない。
- 4) 木を伐採したら、その代わりの木を必ず植える。
- 5) 古新聞や古雑誌を回収する。そうすれば製紙会社はそれで新しい紙を再生出来る。

母の講義はこうして終わりました。昔は母が山の管理人に講義をしている間、私たちは遊びまわっていました。

それはいつもの通りの、母が大好きな、そして私たちも大好きな美しいイサログ山への遠足でした。

でも今回私たちは、もっとイサログ山について学び、どうやってイサログ山をまもったらいいのかを勉強しました。これは、マラスベイ滝の滝壺でダイビングをしたかっただけの仲間のティトが、足にけがをしてしまったからだけではありません。私たちは皆地球を愛していて、自分のできる小さな範囲で地球をまもって、もっと住みよい星にしたいからです。

本当の自然

(原文)

今井 梨花 (12 歳)

米国ニューヨーク州

ニューヨーク育英学園フレンズサタデースクール

私の住んでいるニューヨーク、マンハッタンでは虫を見かけることはあまりありません。外に出ると緑のしばふもあるし、木も生えています。そこで今までに見た小さな虫といえばハエぐらいです。

私がこのことに気がつくようになったのは、夏休みに日本に帰るようになってからです。日本の祖父や祖母が住んでいる家ではいろんな虫を見かけます。庭に出て土を掘るとミミズが出てくるし、丸虫が転がっていたり、ありの行列に出会ったり、せみのぬけがらがあったりして私と妹はそんな虫を見るたびに

「こわい。」

と叫んでいました。祖父は、

「何もこわい事はないよ。虫も自然の中で生きているのだから私たちの生活に必要なのだよ。」と教えてくれました。庭をながめているとすずめがしばふに下りてきて、しばふをつついています。すずめだけではなく、見たこともないようなきれいな鳥もやってくることもときどきあります。えさを食べにきているのです。虫がいなかったら鳥も困るのです。そう考えると、気持ちが悪いけど少し虫ぐらいいいてもいいかなと思いました。

そういう虫がいっぱいいる生活にも慣れたころ、マンハッタンの家に戻り、公園に行くと何も虫がいないことが不思議に思えました。鳥は時々見かけることができます。鳥はしばふでえさを探さず、ゴミ箱の周りに落ちた食べ物をつついています。しばふに座ってしばふの中をのぞいてみても動くものは見つかりません。木の生えている下の土にしてもそうです。生き物が見えないのです。そして私は不安になるのです。

春になるころ、公園のあちこちに黄色い小さな旗を見かけます。黄色い防護服を着た人が何かをまいて黄色い旗を立てているのです。まいているのは除草剤や防虫剤などだそうです。危ないのでさわったり近寄らないようにしている印らしいのです。そうやって自然とのつながりを切っているから虫などの小さな生き物を見るができないのです。近くに公園があって自然があってよかったと思っただけでしたが素直に喜べなくなりました。地いきの新聞で、そのような薬品も自然なものに変えていこうという記事を読みました。私はそのことを知ってうれしく思いました。私たち人間は、自然は私たちの一部だということをその自然は、人間にもやさしいものではないといけないと考え、使う薬品

も変えていったのだと思います。私は早く自然に近い公園ができるといいなと思います。

人間が住みやすい地球になるように、人は考え、行動し、発明してきました。昔の暮らしに比べると今の暮らしはとっても楽です。私たちの生活が楽になった分、地球は傷ついてきました。そして地球温暖化や酸化や酸性雨など、自然とつながりをもって生活している私たちの生活に変化が起きて初めて大変なことになったと気づくのです。今の生活を昔の生活に戻すのはむずかしいと思います。でも地球が傷ついて、自然のバランスが完全にくずれてしまう前にまだ私たちができることはたくさんあります。むだに物を使わない、ごみを増やさないなど、まず身の回りのことから一人一人気をつけなければ変わらないのです。自然とのつながりを切ってしまうような行動ではなく、自然とのつながりを考えた行動を取れば、きっと地球の傷も治ってくると思います。私たち人間も自然の中で生きている物の一つだということを忘れずに、地球に感謝しながら生活することが大切だと思います。

私たちの地球をまもる

(原文は英語)

リンダ・チュー (15 歳)

ニュージーランド・クライストチャーチ市

ヴィラ・マリア小学校

これはとても広く議論されている話題なので、「地球をまもる」と聞くとすぐに、リサイクル、省エネ、公害など、ちょっと例を挙げただけでも、いくつもの言葉がある方向に向かってあふれ出てきます。でもリサイクル、省エネ、公害などが重要なのは疑いの無いことですが、まさに現実、それだけでは十分ではないということです。根本的に考え方を考える時が来たのです。私たちの集団的意識の撤回期限はとうに過ぎているのです。今日に至るまで私たちは環境保護を口先で唱えるだけで、浪費と消費の限りを尽くしてきました。ことわざにもあるように、必然に迫られた思想ほど強力なものはありません。

私たちは今や、限界点に達しており、どんなに遅れた意識の人にも、限界点は今なのだということが明白になっています。私たちはグローバル化された世界に住んでおり、ますます相互依存の度合いを強めています。私たちの愛国心をもっと広げて、人類全体や生命そのものまでをも包み込むときに至っているのです。このエッセイでは、人口、欲望、他人と環境に対する思いやりの三つの主要な点に焦点を当てようと思います。

最初の項目、人口を論ずる時、50 年前には世界の人口は 3 億人だったということを念頭に置かなくてはなりません。これが今や二倍の 6 億になり、消費者として私たちは地球の許容限度を超えています。政府レベルでは、決して各国間での厳しい措置に頼るのではなく、現在進められている、すべての国の認識向上のための広報運動の一環として、持続可能な世界的人口増加の見通しに対する調査が行われるべきです。この分野では先頭に立っていたアメリカ政府は、家族計画や人口教育に対する資金援助を、国内的にも国際的にも止めてしまいました。地球の未来を心配している私たちは間に合なくなる前に、自分たちの政府に圧力をかけて、人口過剰に対する措置取らせるべきです。

ここで考えている二番目の議題は欲望、特に先進諸国の欲望です。前世紀、技術が無くて、私たちの祖母が自分で石鹸を作らなければならず、洗濯が重労働だった頃の生活に戻りたいと思う人は誰もいません。でも繰り返しますが、私たちは余りにも必要の枠を踏み越え、際限なく心無い獲得の世界に踏み込んでしまいました。今や私たちは、飢えを満たすために食べるのではなく、味覚を追求するために食べ、暖かさ、たしなみのために着るのではなく、社会的地位を示し、人を幻惑するために着ています。

この私たちに共通した危機的状態に対する認識を喚起する運動が進行していると私は信じています。もう私たちは自分たちを、血縁者以外は全員殺さなければならないという強迫観念にかられた、孤立した部族などを見なしてはいません。それどころか、私たちは自分たちを、あらゆる創造物を含む、より大きな全体の一部と見なしています。どこでも若者は新しい時代精神を受け入れ、刷新された精神が私たちの良心を呼び起こしています。今や希少動物をカメラ以外の何物でもとることは許可されていません。こうして私たちは、私たちすべてを生存させている地球をまもり、敬意を払うという最初の試みの一歩を踏み出しているのです。

問題なのは、私たちが個人として、日常生活や地域社会で、どんなことが出来るのかということです。

ここで明記されるべき四つの重要な点があります。まず何といても第一は、私たち全員に影響を与えている問題を知る義務がある、ということです。インターネットは環境問題に関する情報の宝庫で、フレンズ・オブ・ジ・アースやグリーン・ピースなど、最近の問題をもっと学べる団体がたくさんあります。

二番目に私たちは、話したり、新聞に投書したり、学校で討論をしたりして、環境に関する言葉を広めるべきです。また、美術作品やポスターで、希少動物や、私たちが維持したい、美しい自然が置かれた苦境を、視覚的に訴えることが出来ます。

私たちが皆でできる三番目の方法は、地域社会の取り組みに参加することです。この良い例は、私の住んでいるカンタベリー州で現在行っている、ジ・エアープランです。これは、クライストチャーチでの焚き火を禁止し、旧式の固形燃料バーナーを、段階的に除去する取り組みです。カンタベリーでは、冬季の大気汚染の90%は家庭暖房が原因です。ですからエアープランは、薪や石炭を燃やす家庭を減少させる解決策となり、これは実際静かな冬の夜、大気中に漂って、私たちの気管を詰まらせ、大気を汚染する煤煙の度合いを大幅に変えることになるのです。

最後に、地球をまもって生きる仲間として、よいと思えることを毎日の生活の中で実行してゆくべきです。

実例を示すことはとても効果があるので、これを肝に銘じて勇気をもって立ち上がり、私たちの唯一の星、地球をまもりましょう。

一人一人が重要な変革者

(原文は英語)

モーゼス・アトラムス (15 歳)

ガーナ共和国ボルタ州

クパンド中学校

この作文コンテストのことをインターネットで初めて知った時、僕は「よし、いつも思っていることを書くだ」と自分自身に呼びかけた。僕が応募しようと思ったのは、賞のためというより、世界を良い場所にしようとして一生懸命やっている人たちの仲間に加わりたかったからだ。

人類が過去に行ってきた活動が、僕たちの地球を傷つけてきたことは否定しようもない。水は僕らの生活にとっても深い関わりがあるが、人間は家庭や工場から出るゴミ、垂れ流しの下水、染料、化学薬品などで汚してしまっている。水質の安全を脅かし、水性生物の多くを死滅させてしまっている。人間同士の争いが水資源に対してもいろいろと影響を及ぼしている。例えば、韓国の水源は朝鮮戦争の時の石油流出事故で汚染されてしまっているのだ。

どんな動植物も、農家や密猟者や林業の人が普段からやっている伐採や、焼畑、密漁や狩猟など、人間の際限ない活動で生命の危険にさらされている。

誰もが安心して幸せに暮らせる社会を築けるかどうかは、人間一人ひとりがどうその役割を果たすかにかかっている。政府から、NGO (非政府組織)、そして最も重要な個人に至るまでそうだ。

まず、政府は戦争や、暗殺、クーデターなどを未然に防ぐことで、「持続可能な平和」にふさわしい環境づくりをしなければいけないと思う。心機一転が必要だ。何百万ドルもお金を使って大量殺戮兵器を買ったり作ったりするかわりに、こうしたお金を、貧困や飢え、環境汚染、乳幼児死亡、エイズ、マラリア、ガン、その他命に関わる病気から救う人道支援や環境問題に使うことができるのだ。「平和」があってはじめて、あらゆるレベルの開発が可能となるのだと思う。

他方では、僕たち個人個人が何をやるかだ。僕らは、自分たちと異なる文化や、宗教、生活習慣を尊重し、理解し合わなければならない。文化や、民族、宗教、国の違いなどに関係なく、この地球上で共に暮らしていくことを学ばなければならない。そうすることで平和がもたらされ、軽蔑し合ったり、憎しみ合ったり、戦ったりしなくなるからだ。

いくらみんなを幸せにしたいと思っても、恵まれない孤児や、難民、ストリートチルドレン、それに障害者たちが救われなければ完全とは言えない。恵まれない人々の所へ行って、物心両面で助けてあげれば、彼らはきっと自分たちが愛され大事にされていると感じるだろう。これはある孤児の少女が、僕に言った言葉だ。「ねえ、お兄ちゃん、みんながお兄ちゃんみたいになってくれたら、もう二度と、

悲しがりたり、淋しがりたり、絶望したりすることがなくなるのに」。僕はその言葉に本当に胸を打たれた。みんなでこのような恵まれない子供たちに、自分たちにも父親や母親がいると感じさせられたら、だれもが安心して幸せに暮らせる地球社会を必ず築くことが出来ると思う。

私たちの地球を大切にしよう

(原文は英語)

モニカ・コワルスカ (15 歳)
ポーランド・グダニスク市
グダニスク市立第二十中学校

私はかつて花の町と言われたグダニスクの 15 歳の住民です。残念ながら、それははるか昔のことで、1990 年に生まれてから、私はポーランドで最大の汚染地域の住民の仲間入りをしたのでした。

最も若い世代の一人として、私はこの地球を破壊から守りたいと思っています。環境に優しい町で生活し、遊び、働きたいと思います。超過密状態で生活することなど、考えただけでも嫌です。こういう生活は百年もすれば、二千年期初めの利己的文明の象徴と言われるでしょう。近代文明は地球にとって有害とまではいなくても、優しくないということを知らなければなりません。すべての工場は空気や水を、ゴミの投棄は大地を、車の排気ガスが、火力や原子力発電所が、環境を崩壊寸前にまで追い詰めています。前世紀の世界的戦争が環境に与えた影響など、まさに論外です。本気で自分たちの惑星を生態上の不毛地帯にしたがっているなんて、私には考えられません。そんなことは絶対いやです！

私は、地球には環境に優しい農業と、小規模で地域に根付いた近代的で環境に害のない技術が必要だと思っています。人間と自然双方の欲求を結びつけた国立公園や自然保護区をもっと設立すべきです。また私は、大豆に含まれる蛋白や澱粉や脂肪を高温の蒸気に当てて特別な処理をして、プラスチックのような物質が作れるのではないかと考えています。使用済みの紙は、100%リサイクルすべきです。私の一番大きな夢は、町や市の中心を歩行者専用区域にして、そこに文化娯楽施設や商業センター、さらには公園や緑一杯の広場を造ることです。建築の主流には庭やミニ公園付きのテラスのある家になるべきです。安全な角度で交わっている道路は公共交通手用にし、別にきちんとした自転車専用道路を造るべきです。私は毎日、母や妹たちと海沿いをサイクリングします。これらの旅は私にとって、本当に忘れられない経験となっています。若葉のみずみずしい緑を眺めたり、木の中で歌っている鳥のさえずりを聴いたりするのが大好きです。こういうことは、視界のどこにも灌木一本生えていない、コンクリートブロック造りのアパート街では、ほとんど得られないものです。

でも、私たちが自転車を日常の交通手段として市内の通勤に使うためには、もっと自転車専用路が必要です。これには、既にある街路に自転車用のレーンを付け足したり、新しく作ったりすることが必要です。私の考えでは、車は緊急の時だけに使用すべきだと思っています。さらに、住宅街には特別な自転車スタンドを設けて、それぞれに休憩用の緑地をつけるべきだと思っています。そして、小さな専門

店があって、健康的な、オーガニック食品を売っていただきたいと思います。

私は典型的な家族が、公園で散歩したり、子どもたちと動物園や海に行く代わりに週末を過ごす、巨大スーパーというものが大嫌いです。こういう巨大スーパーは、プールや他のスポーツ施設、アートギャラリーや映画館や劇場などの入った文化施設に変えるべきです。そして、これらの施設は、お金持ちでも貧乏な人でも誰でもが使えるようにすべきです。このような街では犯罪などほとんど無くなることでしょ。

農業をやっている私の叔父は、分別した有機廃棄物をたい肥にして使うことも出来るのです。その他にも、紙のようにガラスもリサイクルできるのです。私の両親でさえ、小さな虫が中に入っているりんごをほとんど食べた事がないそうです。と言うのも、最近では全てが化学薬品漬けだからです。

住居は断熱素材で建てられ、建物は周囲の環境と調和したものであるべきです。そして太陽エネルギーで暖房するのです。さらに、節水、節エネルギー装置が備え付けられているべきです。こういう事をして初めて、私たち若い世代が本当に地球を大切にしているといえるのです。地球は比喩的にも、実際上でも、私たちの手の中にあるのです。だからこそ私たちが地球を破壊から救える者であり、それによって同時に私たちの生命も幸福も守ることができるのです。

私たち一人一人が今日、約束するのです。私たちは地球を大切にするのだと。次に宇宙に行く宇宙飛行士が、1971年にアポロ14号から帰還したエドガー・ミッチェルのように、「地球は白く動く霧のベールの中の輝く青い宝石のようだ。神秘の黒い海のなかの真珠のような・・・」と言えるように。今の地球だったら、南極や北アメリカ上空のオゾンホールを見て、宇宙飛行士はがっかりしてしまうでしょう。そして青い宝石の代わりに、硫黄や二酸化炭素にまみれた、茶色の汚い地球を見ることになるでしょう。だから15歳の私は主張するのです。

「あなたが自然や水や太陽や青空が好きなら
自然や水や太陽や青空もあなたを好きになるようにしましょう
何故なんて聞かずに」と。

地球を大切にしよう

地球は私たちの家

美しく可愛らしい家

私たちは一人ぼっちではない！

地球を苦しめてはいけない

皆ここで生きていたいから

今ここで 皆で誓おう

あなたを滴のように透明にすると。

心に植える木

(原文)

西山 健二 (17 歳)

静岡県

オイスカ高等学校

私が通う学校の母体であるオイスカ (OISCA) という団体は、インドネシア、フィリピン、ミャンマーなどの途上国を中心に、学校単位で子供達に植林に参加してもらう「子供の森」というプロジェクトを実行している。現地の子供達に植林を通して木に対する思い入れを持ってもらい、いつかその子供達が中心となる未来に緑を残し続けるためである。私はオイスカ高校に通い、環境の授業を通して植林についての知識を他の高校生よりも身につけておきながら、実際には植林をした事が無かった。その事で私はずっと増え続ける知識に対する後ろめたさを感じ、そんな後ろめたさよりも強く、「植林がしてみたい。」という希望を抱いていた。

去年の冬、学校の研修旅行でインドネシアに一ヶ月間行き、そこで私は生まれて初めて「子供の森」に参加する事が出来た。現地の子供達やスタッフと共に、マンゴーやオリーブの木を何千本も植えた。環境の授業を通して想像していた世界よりも、ずっと素晴らしい世界がそこにあった。「百聞は一行に如かず」という言葉が僕の中に生まれた。初めの方は現地の子供達の笑顔の眩しさに驚いていたが、そのうち気にならなくなった。現地の子供達の笑顔に慣れたのではなく、私自身、そんな笑顔になる事が出来ていたのだろう。実際、日本に帰ってから現像した写真の中にある私の顔は、自分でも驚いてしまうほどキラキラしている。そして、恐縮ながらこの私自身を含め、木を植えた皆の眩しいばかりの笑顔が詰まったその写真を見る度、「未来から緑が無くならなる事は無い。」と、緑に包まれた未来を信じる事が出来る。正直な話、インドネシアで植林に参加するまで、環境の授業を通して環境破壊の現状を知る度「緑が溢れる未来など無いのではないか。」と失望していた。今でもインターネットや本を通して環境破壊の現状を調べると、愕然としてしまう事がある。それでも私は、私の一つの宝物であるあの写真の中にある、私を含んだ「あの子供達」がいる限り、「未来から緑が無くならなる事は無い。」そう思い続ける。そう信じ続ける事こそが一番大切だという事を、私は一ヶ月間の研修を通して見つけ出す事が出来た。

「一部の人が植林をしたって、焼け石に水だ。」

誰かにこう言われた時、環境破壊の現状を見れば、悲しいけれど反論する事は難しい。しかし、それでも私はずっと、その「一部」の中にい続ける。大人になっても、自然の前では「あの子供達」であり続ける。思い続ける事、信じ続ける事を、全ての人がやめてしまった時こそ、この地球から緑が無

なくなってしまう時なのだと私は考える。逆に言えば、『私を含んだ「あの子供達」がいる限り、未来から緑が無くなる事はない。』そう信じ続ける事をやめなければ、その希望は無になる事はないのである。

私は、もっと沢山の人が自然と関わりを持ち、今は「一部」だと言われる「あの子供達」が増えていく事を期待している。その「一行」は、国際規模の植林で無くとも良い。ベランダで小さな花やプチトマトを育てる程度でも良い。一人一人が、出来る範囲で自然と関わりを持ち、「自然に対する思いやり」という木を心に植えた「あの子供達」になっていけば、「環境破壊の現状」も変わっていくのだ。

私が日本に帰ってきた今でも、私と現地の子供達があの時一緒に植えた木は、きっと成長し続けている。もちろん、これからだって。私の心に根を張っている「自然に対する思いやり」の木が、インドネシアで育つ希望に満ち溢れたあの木に負けない様に成長し続けるためにも、私は、私の心に光と潤いを持ち続けていく。いつか、当たり前鮮やかな緑が地球上にあり続け、「植林」という言葉が良い意味でこの世界から無くなるのを信じて。

団結して変わるか、それとも自滅するか

(原文は英語)

チャンダ・ムタレ (19 歳)

ザンビア・ルサカ市

ザンビア大学教育学部

自然は私たちに豊かな恵みをもたらしてくれている。それだけではなく、自然は技術革新のヒントにもなってきた。私たちは自然から素晴らしいアイデアを与えられてきた。例えば、潜水艦や飛行機、冷蔵庫など、数えれば切りがない。さらに、雄大な山々、美しい川、様々な野生生物、息をのむような数々の景勝地など、素晴らしい自然の景色は私たちを魅了している。しかし、こうした素晴らしい自然に対して人間は恩を仇で返してしまっている。木を伐採された森は砂漠になり、水を抜き取られた川は川底を見せ、氷山は溶けて洪水を起こし、乱獲された野生生物は絶滅の危機に瀕している。

地球の温暖化、汚染、森林破壊、洪水、旱魃、その他の破壊は私たちが原因を作ったのであり、責任は私たちにある。だからこうした問題は「放っておいても何とかなる」と考えてはならない。何とかしなければならぬ。環境問題の解決策はとても単純で実現可能なものなのだ。「あなたと私」が最善の解決策なのだ。ただし、「私たちが心を改めれば」の話であるが。私たちは京都に集まり、例によって多くの合意書に署名した。しかし、あれだけ話し合ったことが実践されているのだろうか？ 私たちはもっと現実に目を向けなければならぬ。

私が世界に訴えたいのは言葉や計画だけではなく、行動面でも心から団結しなければならないということだ。この団結は、核廃棄物の越境廃棄や有害化学物質の海洋投棄の禁止を伴う団結だ。この目的が一本化されると、公益よりも利益が優先されることがなくなるのだ。これを世界が実現するには、国家間の平和、信頼、相互尊重がなければならない。団結をしないと、地球は衰える一方で、私たちはだましあいを続けることになり、このまま戦い続けることになる。戦争は、悪の塊であるだけでなく、地球を破壊へと導く確かな方法でもある。だから、私は静かに祈り続けている。「私たちが行ってきた悪を正そうとするのなら、まず、平和の大義のために団結し、自らを変えよう」と。

世界は、自然から原材料を与えられて技術的に進歩してきた。ところが、残念なことに、私たちはテクノロジーを自然の「敵」にしてしまった。憂慮すべき例を挙げてみよう。衛星写真を見ると、ブラジルでは 8 秒ごとにサッカー場 1 つ分の広さの森林が消えている。どうしてこのようなことになるのだろうか？ 私たちが開発したチェーンソーや重作業車両を使えば大いにありうることなのだ。テクノロジーは、情け容赦なく資源を枯渇させるためではなく、資源を維持するために使用すべきであると思う。天然材料に変わるものを考え出すためのテクノロジーを利用し、合成材料の研究への投資を

増やさなければならない。その名称も用途も全くいただけない「大量破壊兵器」という不適切なテクノロジーの研究に巨額を投じるのは恥ずべきことだ。それらの予算を、人間や環境に安全な原子力エネルギー作りなど、もっと建設的なことに投じるようにしてはどうだろうか。私たちは変わらなければならない。

持続的発展に教育は大切な役割を果たすものだが、テクノロジーと同様、その目的のために十分に活用されているとは言えない。特に開発途上国の一部農家による開墾過剰は無知から生まれたとも言えるのだ。この問題を食い止めるには、政府や NGO は環境教育に投資すべきだ。問題の影響ではなく、問題の原因を解決するために戦うべきなのだ。未来を決めるのは若者や子供であるのだから、地球に優しくする必要性を特に若者や子供に伝えるべきだと思う。また、メディアは、我々の軽率な行いが招いた衝撃的な結果を包み隠さず伝え、「環境危機なんて冗談だ」と考えている人が、心を入れ替えるか、少なくともそうしないと、恐ろしいことになるということを分からせるようにするべきなのだ。

しかし、「現状を是正することなど 1 人ではとてもできない」と考え違いをしてはならない。結局のところ、この世界を作っているのはあなたと私なのだ。私は、「何かをすること」あるいは「何かをしないこと」によってコミュニティの環境に貢献している。私がコミュニティで実践する小さなことがまさに大切なのだ。今日、私が 2 本の木を植え、コミュニティの人が私の真似をすれば、1 ヶ月で森ができるのではないだろうか？ 空き缶拾いは、つまらない仕事のように見えるかもしれないが、浜辺がゴミだらけになり、分解されないプラスチックが環境災害になれば、コミュニティも、私がしている一見無駄な仕事を評価してくれるだろう。コミュニティで水が出しっぱなしになっていたら素通りしないようにする。それは責任ある人間としての私の義務だ。結局のところ、コミュニティで私にできる最大の貢献は良い手本となることだと思う。行動は言葉より雄弁なのだから。

私が世界に向けて言いたいことは単純なことだ。「団結して変わろう。そうしなければ自滅してしまう」ということだ。持続的でない発展は、偽装された破壊でしかないのだ。私たちは、今すぐ必要なことだけではなく、もっと未来のことを心配しなければならない。これからの私たちの人生は未来で送ることになるのだから。地球は私たちに優しい。私たちも地球に優しくしなければならないのだ。

私たちの地球をまもる

(原文は英語)

サラ・キャメロン (21 歳)

オーストラリア南オーストラリア州

オーストラリア国立大学

確かに私たちは今の生き方を続けることはできます・・・より良く、より持続可能な未来への選択に望みを託して。私たちは技術が、私たちの作り出す荒廃から私たちを救い出してくれるのを待つこともできます。私たちは太古の森を切り倒し、廃棄物を遥か目に見えない遠くに埋めて、後で何とかすれば良いと考えることもできます。しかし、未来世代を永劫に増え続ける負担から解放し、我々がほんの瞬間的便利さのために作り出す問題に対して、魔法のような解決をもたらすシンプルな方法がすでに入手可能な今日、そんな事をするのは愚かしいことです。

幼少から環境に対して敏感だった私・・・その私に、自分のライフスタイルが、一生懸命護ろうとしていた地球を実は痛めつけていたと悟る瞬間が、ある時来ました。その真理の瞬間は、スーパーマーケットで、ビニール袋に入った、安物のスパゲッティを買おうとしていた時に来たのです。私は、自分にお金の余裕ができて、もうちょっと高い、有機栽培の、袋詰めされていない食品でも買える、と思えるようになった時でも、あのスパゲッティのビニール袋は埋立地に捨てられているだろう、そしてそれから何世紀もそこに存在し続けるのだろうと考えたのです。自分がそのような荒廃をもたらすのだという考えに耐え切れず、私はスパゲッティを棚に戻して、二度と振り向かずスーパーマーケットを後にしました。有言実行を座右の銘にして以来、私は自分の人生の一步一步を地球への配慮をもって、ということは、地球に依存する人類への配慮をもって歩んできました。行動の一つ一つ、買い物の一つ一つが「これはどこから来たの？」と「これはどこへ行くの？」という疑問を伴わなければなりません。買おうとするものが再生不可能な原料で出来ていて、消費された後は廃棄物になり、地球を汚染し、空気を汚染し、又は水を汚染するとわかると、それを買うことは難しくなります。今日では食品でも、衣料品でも、交通でも、動力でも、持続可能な代用品が入手出来ますが、この代用品とは、私たちが住んでいる地域によっても異なってきます。私にとってこれが意味することは、包装していない、有機栽培の、そして、どこでもいいから現地産の食品を買うことです。と同時に、私は不必要な衣類は買わないことに決めました。これは環境に対して、以外にも凄い影響があるのです。私は車に乗るかわりに歩き、私が使う最小限の電気は再生可能なエネルギーから取得します。

これらのシンプルな解決法で、私は再生不能且つ不必要な消費主義によってもたらされる、地球に対してのマイナスの影響を回避してきました。多くの人が私をからかいました。いまだに何百万もの

人が廃棄物を生み出し続け、我々の孫の世代までがそれと格闘しなければならないであろう現在、一人の人間が行動を変えるだけでは不十分だと言うのです。でも私は、実例をもってするのが、先頭に立つ者のすることだという主義を、頑として押し通しました。数年間は、殆ど目に見えた効果は現れませんでした。しかし、その後友人や、家族や、遠くの知人から、私の生き方に興味を持ったという言葉が出始め、さらにしばらくすると、自分たちの生活にも私の主義を取り入れたと言ってきたのです。英国に住むある友人は、空気を汚染するよりはましだと言って、毎朝 2 時間かけて、職場までサイクリングをし始めました。懸命に私を探し出して、どうやったら環境に対する影響を最小限にできるか、助言を求めてきた人たちもいました。私たちが今日、持続の可能性を作り出せるのは、こうしたシンプルな行動を通してなのです。

持続可能な環境と、地球規模の調和の探求において、私たちは自分の行動が自分の住む世界を作るのだという事実を、決して見失ってははいけません。私たちが持続可能な事例になり、現代社会が直面している問題に対する解決策を披露する必要があります。私にとってこれは、一見シンプルな行動と、それに付随した行動の地球規模での絡み合いを考慮した、簡素な生活を意味します。それは消費を必要にまで最小化することを意味します。それは意識的に消費を行って、企業に未来は価値ある商品であることを示し、且つ意識を消費主義以上に高めて、我々の余暇が、地球の限られた資源の不必要な消費に基づかないようにすることを意味します。私たちは自分が買おうとする商品一つ一つに対して、自分と同様にそれを買おうとする人、もしくは買いたいと思っている人が他に 60 億人いるのだと想定した上で、「これは持続可能な商品なのだろうか？」と問わなければならないのです。

私たちはまた、自分は相互依存の世界に住んでいるのだということを認識しなければなりません。私たちは今日、国際レベルでも、地域レベルでも共同体の一員なのです。ですから私たちは、私たちの行動の、国境を越えた影響を考慮して、地域的、地球的に果たす自分の役割に対する責任を取る必要があります。何よりもポジティブな展望を持つことです。私たちは問題を政府や、企業や、特定の国になすりつけることなく、私たち一人一人が果たす役割を認識して、高い志と、誠実さと、持続性をもって、共に行動してゆくべきなのです。

窓辺から

(原文は英語)

チャン・テ・フォン (23 歳)

ベトナム・ハノイ市

立命館アジア太平洋大学 4 年生

朝早く、窓を開けます。さあ、新しい 1 日の始まりです。そこには何が見えるでしょう。葉が生い茂りフルーツが実る木、緑の山、青い空、それともお隣の幼い友達の微笑でしょうか？それとも煙と埃の舞う広い道路、巣をかける木を捜している 1 人ぼっちの鳥でしょうか？こうした風景は地球上のどこかにあることでしょう。風景が今以上に美しくなるかどうかは人間の行動にかかっています。

私たち人間は、自然の恵み、そして人との関係で生きていくことができるものです。私たちの祖先は地球で生き、自分たちの世界を作っていました。私たちは、祖先からたくさんのもを受け継ぎ、それ以上のものを次の世代に伝えていきます。どういうわけか人は貪欲です。常により良い生活を求めてより多くを欲しがります。しかし多くの人には「より良い生活」の本当の意味を理解せず、「より良い生活」を手にする代わりに大切なものを置き忘れてしまっています。私たちの美しい地球を傷つけているのです。たくさんの排出物が川に流されているのを目にしました。大量のガスや埃が大気中に排出されているのも見ました。大都市だけでなく郊外でも、のどかな光景を台無しにする騒音が響いていました。また、戦争の話も耳にしました。戦争には勝者はいません。人々が苦しみ環境が破壊されるという点では、戦勝国も敗戦国も同じです。

「地球を傷つける」とは環境破壊だけのことを言うのでしょうか？環境破壊ははっきり目に見えるものです。しかし環境破壊とは別に、誰もが気付くとは限らない「破壊」があります。それは文化的・精神的に価値があるものの破壊です。史跡には歴史の名残がわずかに残っているだけです。こうした古い文明を伝えるものは、きちんと守らなければ失われてしまいます。また、いくつかの言語も消えようとしています。その結果、おとぎ話、伝統的習慣、その他文化的に価値があるものが失われます。祖先が私たちに伝えてくれたものを次の世代に伝えることができなかつたらどう説明すれば良いのでしょうか？ある意味ではこの「破壊」は環境破壊よりも危険です。この「破壊」が環境破壊につながることもあるのですから。

教育を例に取って説明しましょう。文化的価値観が破壊されているのに、どうして優れた教育をすることができるのでしょうか？そして優れた教育がなければ、何らかの活動によって自分たちが環境破壊を進めていることにどうやって気付くことができるのでしょうか？

朝早く開けた窓に話を戻しましょう。外に出る必要はありません。私たちの日々の活動の結果はこ

の窓からでも見るすることができます。平和な光景を愛する気持ちが強いほど、平和な光景を末永く残したいと思います。では、汚れた川を清掃すればよいのでしょうか？埃や煙を除去する機械を発明すればよいのでしょうか？それとも、宿無しの鳥に巣を作ってやればよいのでしょうか？そのようなことをしても大した役には立たないでしょう。根本的原因が手付かずだからです。間違いを直すよりは間違いをしないようにすることです。また、たった1人で地球全体を変えることもできません。

人が有害なことを行う原因はその人の意識にあります。ある行動について「悪い」と思わなければその行動を止めません。別の言い方をすると、地球に優しくすることから得られるメリットが分からなければ、地球に優しくできません。

では、こうした意識や態度を変えるにはどうしたらよいのでしょうか？教育やプロパガンダから始めるのがよいと思います。子供のうちに学校で、私たちの美しい地球への愛を芽生えさせるのです。地球についての物語を読んで聞かせ、写真や映画を見せるのです。また、野外学習で具体的な場所へ連れて行くのもよいでしょう。そして「優しくする」ということを一種の「ファッション」にできれば、積極的に受け入れてもらえることでしょう。

相手が大人であれば、飴と鞭を使い分けることが大切です。大人の場合にも教育は必要ですが、長い時間をかけて形成された意識を変えるのは難しく、子供の場合ほど効き目はないと思います。

最後に、個人だけで状況を改善させることはできないと知ることが大切なことです。多くの人々が力を合わせる必要があります。この問題について愛する人々と話し合しましょう。毎朝窓から見える親しい隣人に手を貸し、彼らの手をしっかりと握り締めましょう。そうすれば、誰でもこの美しい地球をより良くする何かができるでしょう。

肝心なのは小さなこと

(原文は英語)

トマス・シニキ (23 歳)

リトアニア共和国ビリニュス市

ストックホルム経済大学

私は、かつて環境を気にしたことなど殆どありませんでした。海の真っ只中でクルージングをしている船の上で環境汚染を抗議している人たちなど、無用の長物で、何かもっと、生産的なことをすべきだと思っていました。私は、大学の初級環境学のテストをパスするのにちょうどいい、京都議定書のことを知っていました。私はそれで 4 つ単位を取りました。実を言うと京都議定書のおかげで、大学生生活最初の年にスピーチコンテストで優勝までしたのです。その時私は、完璧な盗作で地球に対する私の懸念を書き上げ、英語の先生を感涙にむせさせたものです。4 年後、現実は変わりました。

私は 1982 年にリトアニア、ビリニュスの工業地帯の真ん中で生まれました。3 万人の人口に対して、六つの巨大な工場があって、私たちはリトアニアのマンチェスターに住んでいるのだと思っていました。それらの工場は今や全部空っぽで、誰も雇用せず、何も生産しません。旧ソ連からの需要の減少のせいで、90 年代の初頭に閉鎖されてしまったのです。街は完全雇用から、80%失業に変わってしまいました。どうりで一般労働者が新体制に対して抗議していたのです。郊外を流れている川は猛烈に汚くて、親は自分の子供たちが川のそばに行くことを厳重に禁止していたことを問題にする人など、当時は誰もいませんでした。一度私はそこで魚を釣ろうとして、一週間家に閉じ込められたことがあります。それは 1988 年のことで、その時は殆ど何も釣れませんでした。でも 1 週間ほど前、私は同じ川で 20 インチの鱒を 1 匹釣ったのです。

逆説的に聞こえるかもしれませんが、川は政治的且つ経済的体制の変遷により浄化したのです。見方によっては、このきれいな川は、政治体制が変化してから我々が勝ち得た、透明性と明解性の増大のシンボルなのかもしれません。私たちは重工業が減って、汚染も減った分、より快適な生活を手に入れたのです。でも、いまだに改善の余地のある地域もあります。

多くのリトアニア人のように、私は釣りキチです。私のお気に入りスポットは、ビリニュス郊外約半マイルの所にある池です。夏には私と弟は殆ど毎日そこに行きます。二年前、池の隣に家具工場が建てられました。春の初めに工場は近くの溝に正体不明の廃液を流し、それが池に沁み出しました。魚は死んでしまいました。私と弟、そして多くの幼なじみの友人は怒りました。私は瞬時に汚染に対する抗議をしていました・・・ちょうど、海の真っ只中の船に乗った、無用の長物の人たちのように。近い将来、経営学部を卒業する人間が、90 年代初頭に失業した労働者の家族に 100 以上の雇用をも

たらず新事業に抗議をしたのです・・・常に起業精神と、投資と、雇用創出を唱えることを教え込まれていた身で！

幸いなことに私たちはとても説得力がありました。市役所にも行きましたが、何の役にも立ちませんでした。私たちは、『TVヘルプライン』という、リトアニアのテレビ番組に、池の清掃を手伝って欲しいという電話をして、これをテレビに映したら企業イメージが悪くなると工場に脅しをかけました。これは効き目があって、工場の支援金のお陰で私たちは池をきれいに出来たのです。私たちは何百匹も稚魚を買って、以前のように魚で一杯の池にしようと放流しました。この功績は京都議定書に関する私のスピーチよりも、ずっと満足のゆくものでした。何よりも今回は自作だったのでから。

それから2年たって、工場長は私たちの友人になりました。私たちは彼に、池を人事管理に使うことを提案しました。その結果、工場は年に2回、従業員の魚釣りコンテストを開催するようになりました。彼らは、これは従業員の一体化と愛社精神の強化に役立っていると言っています。それどころか、工場の管理者は環境を単に企業内部の目的に使うだけでなく、責任ある環境対策のスポークスマンになったのです。彼は私の行っている経営学部で、企業倫理の客員教授として、環境問題に関する講義を始めたのです。これは確かに、単なる宣伝活動と思われるかもしれませんが、もし彼の言葉がたった一人でも若者の意識を喚起できたなら、私はそれに対して喜んで拍手を送り、彼の製品に対する需要の増大については、何ら反対するものではありません。